平成２８年1月１９日
（２０１６年）

平成２６年度吹田市立博物館事業評価報告書

吹田市立博物館協議会
委員長　一瀬　和夫

吹田市立博物館の平成２６年度事業評価について吹田市立博物館協議会では平成２７年５月３０日および平成２７年１０月３０日の協議会において慎重に審議した。以下に吹田市立博物館がめざす活動目標に沿って、その結果について報告する。

１ 展示　　総合評価点 ３．５５点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（１－①～②）を参照

（１）常設展示

常設展示については､展示更新がなされたこと､および展示解説を積極的に行ったことは評価できる。ただし、リニューアル計画については、まだ具体的な構想案が示されないままに終わっている。予算が厳しいことがあるが、開館時のような予算額が示されるわけではなく、中途半端なまとまりのないものになるのは想像に難くない。付加的にどのような加工や演出ができるかという案の提示、せめて展示評価・点検、そして絵コンテ、モックアップを示すことが予算獲得の第一歩であろう。

（２）企画展

①春季特別展『近代趣味人の美意識　第11代西尾與右衛門の世界』（４月２６日～６月１日）

江戸時代、旧吹田村の仙洞御料の庄屋を勤めた西尾家の歴史と文化財について第 11 代当主西尾與右衛門を通して家と個人についての興味深い展示がなされた。明治時代に入って社会制度が変革する中、江戸時代から続く庄屋であった西尾家が家の存続をどのようになされてきたのかがよく示された。特に明治時代に入って庄屋文化が消えていく中で西尾家ではどのようにして文化を維持していったのかを 11 代西尾與右衛門の茶の世界で理解できた。11 代西尾與右衛門の茶道での業績は東京での大師会、大阪での十八会についで藪内流とともに行った篠園会の創立である。この会からは山口吉郎兵衛、村山龍平、野村徳七等多くの数寄者が参加し、またその人たちは美術館も建てている。その礎を築いたのが西尾與右衛門である。今回の展示は吹田の江戸時代からの庄屋の歴史と文化についてよく理解できた展示であった。

また、西尾家に伝わる美術品等がまとまった形で展示され、見応えがあった。個々の展示品がもつ価値だけでなく、西尾與右衛門という、明治・大正期の地域有力者の文化的素養や意識が来館者によく伝わる展示であった。ただ、書画や茶道具だけでなく、與右衛門の文化的素養を育んだ史料や、地域社会の中における與右衛門や西尾家の位置づけなどがわかるような史料もあわせて展示・解説していれば、もっと充実したものになったと思われる。

このように吹田市立博物館では他の市立美術館・博物館であまり取り上げない地域に直結した江戸時代の庄屋の（素封家）の歴史と文化をこれまでも例えば中西家、気比家などのように取り上げている。これからも地域の素封家（庄屋）の歴史と文化を取り上げてほしい。将来、展示や建造物との連携作業の基礎となると期待したい。

②企画展示「さわって楽しむはくぶつかん in すいた」（６月１４日～７月６日）

新たな時代の博物館のあり方を展望する積極的な試みで、意義深いものであった。ニュータウン関係の資料にさわるのは、地域住民の「生活」の追体験という意味で有効だと感じた。一方で博物館体験を通して利用者自らが居住する「地域の歴史」をより身近にとあるが、相互を結びつけるその具体的な例について「さわる必然性がわからなかったり、ありがちだった」と利用者コメントにあるように、提案的に示せているのかが疑問である。触れたことでの本質的な気づきや発見を付加する必要がある。

和楽器や仏像レプリカの展示は「定番」として続ける意義がある一方、今後の新展開に向けて「もう一工夫」が求められるのも事実だろう。

関連イベントとして行われたシンポジウムの内容も充実していた。参加人数も多く、企画展の関連イベントとしては成功だったが、議論の深まりという点では、やや物足りない部分もあった。パネリストの人選、時間配分などを再検討し、ぜひ続編を開催していただきたい。

今後、より一層展示方法の工夫を行うとともに、それを通して、さらに展示理論の追究に努めて頂きたい。

③夏季展示『紫金山と釈迦ヶ池ーまもる自然・つくる環境ー』（７月１９日～８月２４日）

博物館のある地を舞台に、自然・環境をテーマにした企画で、市民にとって親しみやすい内容であったことは大いに評価できる。ただ、チラシが単に毎日のイベント内容をカレンダー形式で紹介したものになっており、全体として、今回の企画がどのような意図のもとに立てられたのかがはっきりしなかった。また、それぞれのイベントの紹介についても、記載が簡単すぎて具体的内容がつかみにくいものもあった。一つ一つのイベントが興味をそそるものであっただけに残念である。受けねらいだけになっていないかと点検が必要だろう。

多様な展示となったことはしばしばストーリーや展示自体が持つメッセージとしては希薄になるおそれがある。イベント頼みの集客で観覧につながらないのは博物館活動としては残念でもある。口コミと評判で広がっていく展示にしていくためには展示品なり展示メッセージなりに魅力がある必要がある。もちろんそれを演出するデザインやストーリーも重要だろう。

強いメッセージとストーリーを持つ展示を作っていくためには、製作する側の学芸員・市民・外部アドバイザーに共通したビジョンを持つ必要があるだろう。外部アドバイザーとの良い関係を築けたのであれば、５年程度の中期的な視野を持って共同作業を続ける工夫ができないだろうか。その方が市民も一貫した方針で臨むことができ、また学芸員も吸収できるものが多いだろう。イベントと博物館であることの価値を結びつける工夫をより一層工夫していただきたい。

なお、紫金山と釈迦ヶ池の人文的側面についても、取り上げるべきではなかったかと思われる。

④博物館実習展「すいはくＤＥ実習展　収蔵品×大学生∞【無限大】」（９月７日～９月２１日）

博物館実習生による展示企画は、実習生の意欲を引き出し、効果的な実習訓練ができたという意味で

も、また、より利用者に近い視点を展示に反映させることができたという意味でも意義があった。今後も、このような企画を継続していただきたい。

館の自己評価に従来型に意識を集中させた後、「さわるコーナーを設置するグループも多くあった」とあるように、本来の収蔵品のもつ意義を掘り起こす作業から館の本来の使命を発掘することは今後の展望も見いだせるように思える。

⑤秋季特別展『一片の瓦から―東アジアにふれる―』（１０月４日～１１月３０日）

この特別展は、⑴国際的視野を取り入れた展示であったこと、⑵帝塚山大学附属博物館と連携することにより、七尾瓦窯跡・吉志部瓦窯跡の歴史的意義をきわめて効果的に示すことができたこと、⑶遺跡現地と有機的な関連をもたせる工夫をしたこと、に意義があった。３点とも、今後の展示のあり方に示唆を与えるものといえる。なお、⑶については、夏季展示『紫金山と釈迦ヶ池―まもる自然・つくる環境―』と同様、とかく交通の便が悪いことが指摘される本館の立地が、逆に強みになっていることを物語っており、今後の展示にも生かす必要がある。

博物館がサイト・ミュージアムという本質的な使命をもつことを改めて呼び覚ましている、必要不可欠なものであったと思う。利用者のコメントにある「吹田の財産」は象徴的な言葉だろう。さまざまなニーズに応える瓦を用いた展示手法を今後も継続し、発達させていただきたい。

⑥特別企画「むかしのくらしと学校」（１２月９日～４月５日）

小学校３年生の社会科単元「くらしのうつりかわり」と連携した展示として、子どもたちに昔の生活を体験させる企画で、26 年度もよく工夫された内容であった。今後も続けてほしい。結果小学校の全校が展示を活用したことは何より評価できる。体験内容も充実しており、またアンケートを採り内容の更なる向上に努めていることも素晴らしい。広報活動や内容の充実により、リピーターが増加していることに事業の効果が顕著に表れていると思われる。

さらに、この見学の後に、学校で総合的な学習の時間の一環として、地域のお年寄りからむかしのくらしを学ぶという単元の設定もでき、学習の広がりが期待できるものであると考える。

ただ、アンケートに「60～80 年代といった身近な年代を展示するべき」との意見があったが、これには耳を傾けるべきであろう。また、「むかし」とはいつのことであるかを絶えずはっきりさせること、異なる時代の習慣を混在させ、実はどの時代にもなかった姿を再現していたということにならないように注意することが大切である。展示年代で想定される会話や対話も展示ストーリーに盛り込む方が、その状況におかれた展示群を構成する際によりよく整理することができるであろう。時代と場の設定（厳密なのに楽しめる）を明示するなどして野外キャンプ体験のようなプログラムとの差別化を図るような工夫も期待したい。

２　市民参画　　総合評価点　３．３２点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（２－①～③）を参照

（１）市民ニーズの把握

アンケートに調査に加え、イベント開催時の休憩時間等を活かしてのインタビューによる情報収集が有効ではないだろうか。意見交換会については対象を幅広く捉えることと会合数を多くすることが求め

られる。

（２）市民との協働連携事業

企画展の市民参画は充実している。特に夏季展示では「紫金山と釈迦ヶ池　―まもる自然・つくる環境―」をテーマとし、毎年公募による市民実行委員により企画・準備・運営が行われているのはすばらしいことである。

団体、ＮＰＯ等の連携については各々団体の目的等を十分に把握し、館の目的に沿う形での活用、協働が求められる。焦点をあわせ、役割分担を明確にする必要があろう。

協議会での市民委員の存在は重要と思われる。特に継続性が求められる。

（３）ボランティア

「むかしのくらしと学校」のボランティア参加が多かったのは喜ばしい。なお、小学生高学年から高齢者までのあらゆる年齢層の男女がそれぞれの経験、能力等を活かして快適に積極的に気軽にボランティア活動ができる環境づくりときっかけづくりが肝要と思われる。そのためにはあらゆる機会を活かし、随時見学に誘うとか、活動メンバーからの口コミ等の活用が必要かと思われる。一層のボランティア増加と質の向上が望まれる。

ボランティア、連携団体、市民キュレーター、エデュケーター更にはリピーターとしての学習者など市民連携を多様に求めすぎて活動が分散し、学芸員の注力も分散しているように思われる。どのような市民参画がすいはくにふさわしいのか、検討が必要な印象を受ける。市民キュレーターとミュージアムエデュケーターのすみわけもむずかしい。つねに活動スケジュールのカレンダーを関係者すべてに一覧化し、相互に意識を向けるというのも一案だろう。

３ 地域学習の拠点　　総合評価点 ３．３３点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（３－①～②）を参照

（１）地域学習の支援

「子ども、若年層のイベント」については、２５年に比較して、イベント回数、参加者数とも少し減少したが、その分、子ども・若年層にとってはより有益なイベントが多かったと思われる。何をテーマにしてどのように進めるのか等々、実際にイベントに携わる立場の人にとっては社会人である一般市民を相手にする以上に、苦労する活動だと想像する。ただし、子どもへの働きかけにイベント数や参加者の割合で計るのは妥当なのだろうか。博物館で体験できることがプレミアムになっているだろうか。みのかも市民ミュージアムなどが全小学生を複数回博物館での体験活動に参加するよう工夫を図り、小学生時代の博物館での学びの効果を測定しているが、アンケートの取り方、解析の仕方にしても、ひとつの参考になるだろう。引き続き、努力していただきたい。

「出前講座・依頼講座」に関しては、２６年の開催数では３７回、参加者数では１，２６０名となり、２５年に比べてそれぞれ開催数では５回、参加者数では３０１名と大きく増加している。平均すると毎月３回以上開催していることになり、一段と意欲的な取組み姿勢がうかがえる。開催場所も浜屋敷・大学・公民館・図書館等々の市民が気楽に足を運べる公的な場所であり、なによりも市民がより興味を惹くテーマを選んでいることがよい。市民の居住する市域の歴史文化について市民が肩肘張らずに学べる

環境を積極的に継続提供していることは大いに評価することができる。なお、出前講座やバックヤードツアーについても参加者数より地域の教育関係者の意見のていねいなヒアリングのほうが示唆に富むだろう。博物館がどういう思いで行っているのかを示す活動とセットで対話できることが望ましい。

「レファレンス業務」については強化を強くのぞみたい。地域図書館との連携にもヒントがあるかもしれない。

（２）地域文化の情報拠点

「北大阪ミュージアム・ネットワーク」の機能を生かし、吹田を含めた北大阪にあるたくさんの文化資源情報をより多くの人に紹介し、その情報共有の媒介者としての役割を適正に果たしていることが参加者増加をうながしたものであり、十分評価できる。ただ、活動だけでの評価でなく有形・無形のものを含め館にどのような財産が残るのかを一つの判断基準として考えるべきであろう。

歴史街道推進協議会の西国街道連携事業は、吹田郷土史研究会との共催事業として連年継続しており、西国街道を軸にした市内の歴史文化の一つをテーマとする「講演会」と、その講演会テーマに関る場所を巡る「ウォーク」が合せて実施される。他の博物館との有機的な広域連携事業とも繋がっており、事業期間中の参加者の数が増加していることは注目したい。市民の支持を得ている証左であり評価できる。

４ 情報発信　　総合評価点 ３．４８点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（４－①～④）を参照

ホームページは、内容変更・カテゴリー修正・ボタン追加など、見やすさやわかりやすさをめざしたさまざまな修正が加えられ、内容面の充実も図られており、不断の努力と工夫が評価される。広報誌『博物館だより』の執筆には、市民など外部からの投稿も得ながら、市民の展示活動や研究活動を含めた多彩な事業の実施状況が報告されており、博物館活動の公開と情報発信の役割を果たしていると認められる。

広報活動では放送メディア、特にラジオに注目し、AM、FMのラジオ番組に博物館イベントをどんどん取り入れてもらうよう、働きかけを行い、定期情報としての位置づけまでへと充実させることが必要である。そのためには相手が興味をひく放送ネタにしたいと思う情報を定期的に用意し、時には説明する必要がある。また、市報における情報発信が弱いように思う。市報に掲載する博物館の掲載範囲の制約がどれほどあるのかわからないが、もっとＱＲコードを使用したり、催しの掲載があった方がよい。使用できるすべてのあらゆる機関や人（市長、吹田出身芸能人等）を利用して情報発信していただきたい。

資料データベースの構築・公開は博物館が果たすべき大切な役割のひとつである。博物館利用者の視点をふまえた検討が進められることを期待したい。

５ 学校教育との連携　　総合評価点 ３．５７点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（５－①～②）を参照

小・中・高の各学校種との連携を進め、さらに深めようとする姿勢は評価できる。

小学校３年生のカリキュラム連携展示において参加・体験型のプログラムを取り入れたことは高く評

価できる。「あかりの授業」の出前授業はとても好評なので、他の事柄に関しても教材開発を検討していただくとありがたい。今後の継続的な改善を期待したい。

小学校３年生に対する取組のような小学校６年生を対象とした取組の充実が望まれる。以前、実践されていたものとしては「大昔の人たちの暮らし」として「火おこし体験」「縄文の食生活の体験（縄文クッキー等）」「ミニ竪穴式住居体験」「大昔の人々の衣服の移り変わり」などがあった。

また、紫金山公園の遺跡見学も兼ねて、古墳時代に製陶などの技術や新たな生活様式を伝えた「渡来人」についての学習、さらに戦時中の暮らしに関しても教材化ができるように思われる。

中学校との連携で、第二中学校との意見交換により「吹田の歴史にふれてみよう（第二中学校版）」を作成し、中学生の夏期休業における利用促進をはかられたのは大変良かったと考える。特に今後、中学校との連携を進めるに当たって、社会科教員に広く博物館を知ってもらい、生徒の利用を促進するために、「吹田市中学校教育研究会社会科部（学研社会科部）」に対する働きかけが有効ではないかと考える。同様に、教育センター共催の小中学校教員対象バスツアーも有効な取り組みであるので、是非、継続実施されたい。

また、各中学校が取り組んでいる「職場体験学習」も体験した生徒や、中学校教員にとって非常に有用であるので、生徒達にとって魅力ある職場であることをアピールするプログラムや発信方法を検討していただきたい。

高博連携として吹田高校での出前授業も高く評価できる。今年度のプログラムが生徒自らが学び、研究し、発表を行う「アクティブラーニング」の要素を取り入れた形態であったことは興味深い。是非、高校と連携し効果検証をした上で改善・継続をしていただきたい。さらに課題発見・解決型授業については博物館がおおいに貢献できると考えられる。

以上、様々な取り組みが、児童・生徒にとって魅力的であり、博物館がわがまち吹田を愛する郷土愛を育んでいけるよう、学校教育との連携を推進していただきたい。

６ 資料の収集と保管　　総合評価点 ３．０４点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（６－①～④）を参照

（１）資料の収集

収集方針に沿いながら重点収集資料を中心に近現代史の分野において着実に資料収集が進められたと認められる。また旧西尾家に関連した特別展開催の過程で書簡など新たな資料が確認され、地域性をふまえた重要な資料収集化が着実に進められたことは評価できる。今後、それらの価値づけが求められる。

なお、特別展での寄贈、寄託の呼びかけがなかったとするが、収集のための予備調査や特別展の企画計画の資料の掘り起こしや呼びかけという作業が存在しているはずである。

吹田市の博物館はどうあるべきかという大前提のもとに計画をたてていると思われるが、特に独自性、普遍性、風土性、進取性、継続性、開放性、学術性、大衆性を踏まえて収集計画を検討していただきたい。

（２）収蔵庫

西村公朝資料は、館蔵コレクションを充実、そして新たな特色をつくりだすうえで博物館に不可欠な資料群である。こうした資料群の受け入れを可能にしていくためにも、収蔵庫の拡充は継続して求めて

いかなければならない課題である。展示のリニューアル同様、予算が厳しいことがあるが、案の提示が予算獲得の第一歩であろう。

資料の虫菌害対策は、新規受け入れ資料に対する年２回のくん蒸庫くん蒸と、環境モニター調査が確実に実施されており、良好な収蔵環境が保たれていると認められる。

（３）登録・整理

基本的な作業はしっかり行われ、新規収蔵資料の整理・登録は、確実に進められたが、収蔵資料のデジタル化については進捗があまりみられず、今後の課題といえる。図書や古写真のデジタル登録・管理は進んでいる。収蔵資料のデジタル化は、博物館の情報発信力を高めていくためにも必要なものであり、また、資料の公開方法も含めてデータ利用者の博物館リテラシーに向けた明確な目標、利用効果と影響を考えた方針を示す必要がある。博物館の将来を見据えながらの地道な取り組みが引き続き求められる。

７ 調査研究　　総合評価点 ３．１７点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（７－①～②）を参照

企画展示の準備過程で関係の調査・研究が行われ、その成果が図録、『博物館だより』、『吹田市立博物館館報』、歴史講座などに適宜反映されている点は評価できる。

北大阪ミュージアム・ネットワークにおいて、北大阪ミュージアムメッセおよびシンポジウムを開催し、多くの参加者を得たこと、歴史街道推進協議会の西国街道連携事業に参加したことは、積極的な地域連携事業を着実に進めていることを示すもので、評価できる。今後もこのような積極的な取り組みを期待したい。

調査・研究が、企画展示関連のものが中心で、未調査の市内旧家の古文書調査や目録作成などがおろそかになっているように思われる。1970 年代の『吹田市史』編纂をきっかけに多数の史料が発見されたが、未調査・未確認のものも多いはずである。これらの史料は、廃棄や散逸の危機にさらされており、早急に調査を行うとともに、保存の手立てを講じる必要がある。新『吹田市史』編纂事業が行われていない現在、これらの業務を担えるのは唯一吹田市立博物館のみであり、館としてはその責任を積極的に果たす義務がある。これらの業務は、地味で多大の労力を必要とする作業であるが、市域の歴史を明らかにし、展示に反映させる上でも、また、史料の廃棄・散逸を防ぐ上でもきわめて重要であり、是非主体的・積極的に進めて頂きたい。

８ 施設の整備・維持管理　　総合評価点　２．７９点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（８－①～③）を参照

施設の維持管理については、開館より 20 年以上が過ぎ、展示機器や機械室の機械は経年劣化が目立っているようであるが、劣化はやむを得えないことであり、全体の清掃はもとより展示機器の定期点検、収蔵庫の空調機器の改修等、実際目にふれない事を確実に行っていくことは、たいへん意義のある事だと思われる。

また、園内博物館案内表示板や岸辺駅の博物館案内板設置についてもとてもすばらしいことであり、高く評価する。誰もがアクセスを容易にできる施設であるために街に博物館のアクセス表示案内が増え

ることを望み、今後の課題も確実に進んでいけることを願う。

名神の吹田サービスエリアからのアクセスについては西日本道路と長年交渉を行っているが実現しない。交渉を継続することはいいことだと思うが、吹田市の関係部署との連携はもちろんの事、西日本道路との連携協力が必須であろう。例えばサービスエリアから館までをアートロード(パークアンドアート)として整備すると、市民にとってもサービスエリア店舗を活かした散歩道、ウオーキングロードとなり得ると思われる。

ＪＲ岸辺駅からのアクセスについては、博物館行の専用バス、ＪＲ岸辺駅に案内図とかパンフレット等を置いてもらう、岸辺駅からの道順を明確にするなどいろいろと検討してはどうか。

また、阪急バス佐井寺北の停留所表示に（博物館口）と表示する。市民向けの市のマイクロバスを定期的に博物館入口まで運行する。高齢者、障害者等には有効かと思われる。

あらゆる交通機関を活かし、アクセスを確保し、充実することが今後の館の発展に大きく影響してくる。積極的な館からの提案が必須である。

９ 社会貢献　　総合評価点 ３．８１点

詳細は別表平成２６年度事業評価点（９－①～③）を参照

博物館としての最大の社会貢献は地域の文化の継承と再発見という本来の事業そのものである。こうした観点に立てば、「市民参画」に列挙されている人材育成に関わる各項目も大変重要であり、人材育成を可能にする博物館の活動の源泉として学芸員のスキルの充実がもっとも重要である。多くの事業がスタッフ個々人の努力に依存していることも気になる。事業実施のために学会や研究会などで取材吸収する時間を十分取れるよう図らないと、将来の質の低下を招くおそれがある。

またJICA事業への貢献は地域博物館が国際的な結びつきを実現できる稀有な機会である。その価値は非常に高いが、その果実をどのように市民に見せることができるか。このような事業をしている「すいはく」はすごいな、と思わせるような工夫がほしい。大学実習生への教育にはその一端が現れた。

学会への貢献は会場の提供ではなく知見の提供を求めたい。

＊なお、活動目標ごとになされた総合評価点は学識経験者６名、学校教育関係者２名、社会教育関係者３名、市民公募委員２名からなる計１３名の博物館協議会委員による事業計画ごとになされた５点満点の個別評価の平均点とした。